国語国文学専修
卒業論文成績優秀者
による研究成果
要旨集2021

『百人秀歌』の研究―配列に注目して

文18－0340
菅　千早

研究の目的：①『百人秀歌』の配列について先行研究の説が正しいのか検証する。
②『百人秀歌』を一作品として再評価する。

・そもそも『百人秀歌』とは？

天智天皇から藤原公経（きんつね）まで歌人101名の歌を一首ずつ撰び並べた和歌集。百人一首とはそのうち97首の歌が一致。

『百人一首』は歌人（歌の作者）の時代順

『百人秀歌』は「隣り合う二首ずつが一組になる歌合形式を意識した配列」という様に先行研究では説明がされてきた。

＊歌合…主催者を中心に歌人達が左方、右方に分かれ、それぞれ決められた題に沿って歌を詠み、その優劣を競い合う和歌行事。

先行研究で『百人秀歌』は
・101という半端な歌数、和歌配列の違いなどの理由から
「百人一首の草稿本」と百人一首に完成度の劣るものとして扱われてきた。

もし先行研究の「二首一組」という説が正しければ、例えば３番から８番の歌では３番と４番、５番と６番、７番と８番が一組となるはず、

3（3）あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を独りかも寝む　柿本人麻呂
4（4）田子の浦にうちいでて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ　山辺赤人
5（6）かささぎの渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける　中納言家持

➡優れた歌人を指す「山柿」の二人とその語を用いた人物として柿本人麻呂、山辺赤人、大伴家持の歌は繋がりを持つものとして配列されたと考えられる。

山柿（さんし）の論

『万葉集』巻十七で大伴家持が用いた「山柿の門」という語が何を指すのかについての論。

鎌倉初期には「山柿」は優れた歌人を示し、それぞれ
山→山辺赤人
柿→柿本人麻呂を指すと解されていた。

6（7）天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも　安倍仲丸
7（11）わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海人の釣舟　参議篁

安倍仲丸　701～770

遣唐留学生に選ばれ唐に渡る。日本への帰国を望むが叶わず、この歌は唐で月を見ながら故郷に思いを馳せた歌。

「天の原」＝果てしない大空

江戸時代中期　個人蔵『光琳かるた』
尚学図書（1989）『百人一首の手帖』p14、22より転載

藤原篁（たかむら）　802～852

遣唐副使に選ばれるが大使と乗船する船をめぐり争い、隠岐に流罪に。この歌は隠岐に向かう船に乗る際に京都にいる人に対して詠まれた歌。「わたの原」＝大海

・「天の原」と「わたの原」、初句の語の語感の類似
・遣唐使に関わる経歴
・遠くの地へ思いを馳せる内容面での類似
・この二首が『古今集」羈旅部でも406番、407番と並んで採られていること。
➡以上の理由から６番の安倍仲丸の歌は前の５番歌とではなく、続く７番の歌と組み合わせが意識されていたと考えられる。

39番、40番：恋愛関係
41番、42番：天徳四年内裏歌合
60番～66番：定子サロンと彰子サロン　などなど
他にも紹介できなかった面白い組み合わせがあります。

研究の結論
〇百人秀歌の和歌配列は必ず二首一組になるものではなく、三首一組や連続する７首が一連の意味を持つなど、様々な形で歌同士の繋がりが楽しめる配列となっている。
〇百人秀歌の和歌配列は隣り合う歌の内容や、その作者同士の関係性を併せて見ることで、読者に新たな和歌の楽しみ方を提供するものである。